

と帰国の日を指折り数えて待つておりました。

今、静かに考えると全く勝ち目の無い戦争で、愚かだったの一言に尽きます。戦争は二度と繰り返してはならないと固く心に誓いました。

―貴重な体験談有難うございました。

潜 行

神奈川原 畔 柳 英 男

―簡単な軍歴をお聞かせ下さい。

昭和十七年八月に東京赤坂の歩兵第一〇一連隊に召集入隊し、直ちに広東の貨物廠に移動になりました。

昭和十七年八月独立歩兵第六十六大隊に転属、保定の幹候隊で教育を受け見習士官に任官、第二中隊の小隊長に任命されました。

―それから湘桂作戦に参加されたのですね。

いや半年近く、広東市内の警備と初年兵の教育でした。湘桂作戦中に甲部隊が編成されました。

―甲部隊と言いますと。

簡単に言いますと、特務機関・便衣隊・将校斥候を併せたようなもので、敵中深く挺進潜入し、情報の収集、小部隊の撃破、不穩部落の掃討、流言飛語の流布、後方攪乱、軍事施設の破壊等を任務としています。

昭和十九年六月、広東で節兵団隷下部隊から将校一名、下士官六名、兵三十六名、通訳一名、特別工作員（華人）六名で六班編成されました。

甲部隊の目的は、第十一軍の主力の第二次湘桂作戦に呼応して行動を起こした南支派遣第二十三軍の攻略目標である桂林や柳州の進攻を容易にするため、急遽節兵団をして西江沿岸の要点梧州を攻略させんとしたのですが、甲部隊はその作戦遂行の第一線に立ったのであります。

甲部隊は常時便衣を着用し、状況に応じ敵の軍服を併用。作戦の間、負傷または病気のため行動不能に陥った場合は自決という厳しいものでした。また甲部隊に属している間は無籍者ということで、また命令系統も軍直轄で、岡田芳政参謀の指揮下に入りました。

装備もチエコ製軽機、自動小銃、拳銃、短刀、工作用爆薬、手榴弾及び標旗（黄・黒の立縞模様、友軍に味方であることを知らせる旗）などでした。

当時の戦局は七月中旬サイパン島、ガム島、テナアン等の玉砕、ビルマ戦線ではミートキーナでも全滅など悪化の一途でした。それと共に米国の支那大陸逆上陸の情報がありました。

中支派遣第十一軍は衡陽を攻略し、零陵・桂林・柳州に向い作戦を展開していました。南支派遣第二十三軍はこれに呼応し桂林・柳州を攻略するため梧州に進出をはかり、ここに第二次湘桂作戦が切つて落されました。

―甲部隊の作戦期間、作戦範囲はどのようなものでしたか。

昭和十九年九月から昭和十九年十二月までです。

昭和十九年九月十日 開平攻略

昭和十九年九月十九日 六都攻略

昭和十九年九月二十一日 鬱南攻略

昭和十九年九月二十五日 梧州攻略

昭和十九年十月―十一月 丹竹掃蕩

昭和十九年十二月 貴県進出

湘桂作戦最大の目的を略々達成したので甲部隊は解散となり、隊員は原隊復帰となる。

―具体的にどんな効果がありましたか。

挺進行動の任務期間は短かったが常に派遣部隊に先行し、部隊を迅速に誘導、人命・兵器等の損傷を最小限にとどめられたのは、隊員の犠牲的精神の発揚の賜であり、全員一丸となり西に東に挺進し、万一、企図暴露の際は状況により回避または交戦、後続部隊を速やかに目的地に進出させることが出来ました。これらは実に所属部隊を異にする全員が命令に服従し目的を理解し一致協力、尽忠報国の念に燃え、迅速にして果敢なる戦闘力による成果と確信しております。

―もつとも苦勞されたところはどこでしょう。

どの都市攻略も苦勞がありますが、その中から特に苦勞したところについてお話ししましょう。

一、初 陣

広東の中山大学跡で一ヵ月余の特別訓練の後、肝兵

団（独立歩兵第八旅団）の部隊に二日間派遣され、南下中の第七戦区司令官余漢謀麾下の部隊と従化県城付近で接触しました。夜中敵襲を受けましたが部隊主力と協力、これを撃退しました。

この初陣の結果、甲部隊を三班に分ける必要性、並びに戦闘前の情報がいかに必要かを痛感しました。夜明けと共に前方五キロにある部落まで三班に分かれ、農民・行商人に化けての潜行推進です。廃屋から捜し出してきた農具、車輪一つの手押車、天秤、ザル等を適当に担いだり、押したりブラ下がりたりして、三々五々に歩きました。まるで仮装行列のようですが敵地内での今後の挺進行動の基本動作のため各員真剣に取り組みました。

耕作していた農民はこちらを見もせず、またすれ違う農民、通行人等も振り向きもしません、成功だと確信しましたが長居は無用、油断禁物と部落の手前から設営地に戻りました。この貴重な体験が自信となり、その後の作戦行動に大いに役立ちました。

二、開平県城までの潜行

三埠を攻略し、陣容を立て直した節兵団（独立混成第二十二旅団）は、井上部隊（独立歩兵第六十六大隊）に次の目標として九月十日、開平の攻略を命じました。甲部隊は井上部隊の誘導、挺進の任務を受けました。甲部隊は数次にわたる敵情の偵察、地形の確認及び部落民の民情等熟知の上、万全の態勢を整え、勇躍九月九日午前零時を期して梁金山の友軍第一線陣地から、中秋の名月が照らし出している敵陣地に向かって潜行を開始しました。

全員友軍の歩哨線を音も無く抜け出し、一路敵陣地の後方の丘に潜行、潜伏して終日監視を実施し、あらゆる状況を確認した地点に向かいました。雲が月に隠れた間隙を縫って蛇行する。部落、通路を避け田圃から畑へ、畑から田圃に向かい、畦道を通りクリークに半身を浸しながら潜行しました。その間、無言で、ただ聞こえるのは心臓の鼓動と荒い息づかいのみ。

敵歩哨線に近接、全身これ耳目とし歩哨の動作を凝視しながら先導者に従い猫のように足音もなく難関を突破する。全員の突破を待ち、丘のふもとに辿りつき、

全員を再度確認し、次の指示を与え休息しました。敵陣地内で休息するなんて夢にも思いませんでした。

突然、友軍の陣地から小火器を射つ音響が聞こえてくる。戦闘が近づいてきました。銃声に追われるように潜行を開始、クリークを渡渉し小高い丘陵にへばりつきました。敵の小哨が月光に照らされ浮かび上がる。距離が遠すぎるのです。

三、開平県城攻撃

「ピンコー」の「誰何」を聞くや間髪をいれず小笛の合図の下に火器の乱射と共に小哨兵舎に突入する。忽然として出現した我々の奇襲攻撃に敵は応戦の暇なく、ただ右往左往するのみ。彼我入り乱れて死闘すること数分間。時々聞こえる「山」「河」の合言葉の声……。奇襲成功……。直ちに敵の本隊との連絡用電話線を切断、無線機等を破壊する。

敵は周章狼狽し開平方面に遁走、甲部隊はこれを追撃した。夜が白むころ、敵本隊は奇襲に気付き我が部隊に迫撃砲、チェコ機銃を打ち込む。部落民は避難を開始し、我々はそれに紛れ込み、なおも潜行する。小

高い丘に辿り着くと眼下に開平県城が見える。トーチカ・敵旗・橋梁も指呼の間です。

敵は小哨兵の報告で大部隊で背後を襲われたと誤認し浮き足だつた。その時、我々の後方から進撃した味方に敵と誤認され射撃されたが、標旗を高く振り続け漸く甲部隊と確認され辛うじて同士射ちを免れました。

味方の大部隊が統々第一線に展開し、遂に敵は総退却を開始しました。機を逸さず我々は橋梁下から駆け上がり、全火器をもつて掃討に掃討を重ね、トーチカに立て籠もり橋梁を死守する一部の敵を撃ち散らし、遂に開平県城内に突入しました。その後、残敵の掃蕩、検問を実施し、前衛部隊を城内に誘導しました。

敵の最前線の歩哨線を潜り抜け小哨を奇襲撃破し、これを敗走させ、敵主力の応戦準備を不充分にし、退却に追いつめ、主力と主力の交戦を回避し、速やかに前衛部隊を開平県城内に入城させられたことを、甲部隊の真価と鼻を高々とさせたものです。

― 甲部隊についてどうお考えですか。

戦争はないにこしたことはありません。しかし戦闘が始まればその中で死力を尽くすべきでしょう。

甲部隊の人々は本当によく働いてくれました。任命された時、全員に護身を兼ね自決用の短刀一振が授与されました。初めから決死の覚悟でした。また寄り合い世帯の中でよく一致団結できたことは独歩七一大隊自禮地曹長、独歩六六大隊白石曹長の統率力によること大なるものがあります。

私としても与えられた任務を全力投球した、の一言に尽きます。

最後に便衣着用のまま武運拙なく戦場に散華した独歩一二五大隊出身渡辺稔兵長、独歩一二六大隊出身船場豊上等兵、村山与一上等兵のご冥福をお祈りします。

― 復員はいつでしたか。

敗戦後、漢口郊外の武穴に集結、一年近くの抑留生活を送り、昭和二十一年六月鹿児島に上陸、復員しました。